

Mrs. Gaskell の短編小説における Surrogate Mother について

越 川 菜穂子

(1)

エリザベス・ギヤスケル (Elizabeth Gaskell) の短編小説には、結婚はしないが第三者の子どもに母性的な愛情を注ぎ、その子どもと同居することによって血縁のない家族をつくる女性を主人公とした作品がいくつかある。処女作の「リビー・マーシュの三時代」(“Libbie Marsh’s Three Eras”, 1845) からこの系列がはじまっている。本稿では、この作品および「ペン・モーフアの泉」(“The Well of Pen-Morfa”, 1850), 「半生を顧みて」(“Half a Life-Time Ago”, 1855), 「ヘッペンハイムの六週間」(“Six Weeks at Heppenheim”, 1862) の諸編を考察することによって、ギヤスケルが血縁によらない家族を繰り返し構想した理由を探ってみようとする。

「母性」という語は、今日ではユングの深層心理学に留意して使用すべきだろうが、ここでは単純に、ギヤスケルが “purely motherly woman” (CP 310) などと説明している作中人物にそなわる性質のことである。また母性愛については、そもそも “moral mother” (事典家族) の規範が十八世紀以降に啓蒙思想家や教会関係者や医師によってつくられたものであって、母性愛が女性に先天的にそなわっている本能だという根拠はない、という考えが一般的だ。けれども、「性的欲望を抱かず、家庭と子どものために自己を犠牲にして献身する母」である moral mother は、ギヤスケルが理想としている母親像である。彼女は女性には母性愛が本能としてそなわっていて、それが信仰によって崇高なものになると考えていたのである。

「リビー・マーシュの三時代」でギヤスケルは “feeling of solitariness” (LMTE 172) を探究し、〈孤独〉の経験が真に幸福に生きるための前提となることを語っている。孤児で不器量なお針子のリビー (Libbie) と障害をもつ少年フランク (Frank) はいずれも孤独な

境遇であったが、リビーの働きかけで二人は親密な関係になる。フランクの母親マーガレット (Margaret) は愛児を失い、孤独を深く実感したことによりやさしい人柄になり、幸せな生活に入ることができる。

作者は、孤独を経験しなければ孤独な人を深く理解することはできないということを、愛児を失い独りきりになったマーガレットについての、リビーとその下宿先の娘アンヌ・ディクソン (Anne Dixon) との見解を対照させることにより例証している。アンヌが、マーガレットが障害をもつフランクの介護から解放され自由になった、と言うと、リビーは “. . . don’t think he could ever ha’been, a trouble to his mother, though he were a cripple. She loved him all the more for each thing she had to do for him.” (LMTE 188) と語る。アンヌには、苦難に明け暮れる介護を通して愛が深まってくることが理解できていないのである。

アンヌをはじめディクソン家の人たちは善人ばかりではあるが、裕福であるために、苦しい試練を経た人の愛情を真に理解することができない。マーガレットは近隣では嫌われていて孤立に近い境遇ではあるが、それでもフランクがいるおかげで孤独感を免れている。彼女には母子家族で侘しい暮らしをしていると思われたくないために虚勢を張っている面があり、そのために近隣の人たちから疎外されている。そして、虚勢によって孤立感を抑え込んだために、怒りっぽい性格になっている。

こんなわけで、マーガレットはディクソン夫人と不仲である。人と争うのは、相手の立場を理解する寛容さが欠けているからである。作者は結末で、寛容なりビーの生き方の源泉となっている “Sorrow and Love” (LMTE 193) を “the two purifying angels” (LMTE 193) と書いている。結末でマーガレットは、哀しみと素直に向かいあうことによって愛を知る。

(2)

Enid Lowry Duthie はギヤスケルの創作において nouvelle もしくは short novel が重要な位置を占めていると述べ、*“The shorter form presented hazards for an author with her need to evoke clearly the physical and social environment but offered, if handled successfully, corresponding advantages by encouraging concision in one so naturally fluent as to be sometimes diffuse.”* (Duthie 192) と批評している。「リビー・マーシュの三時代」は短い作品であるが、テーマを読者に伝えるために緊密に構成された、*corresponding advantages by encouraging concision* の才能を感じさせる作品である。

リビーとフランクが言葉を交わしあう前から親しくなれたのは、リビーは天涯孤独で容貌にも恵まれていないし、フランクは障害をもち苦しい日々を過ごしているという具合で、どちらも苦悩をかかえているからである。路地の向かいの窓のブラインドに映るフランクの手と腕の影についての描写は読者の視覚に強く訴え、フランクの肉体の苦痛だけではなく、それに注目しているリビーの姿をも読者に想像させる。語り手は *“She could not help hoping that sleep would soon come to still that incessant, feeble motion.”* (LMTE 170) と述べてリビーのやさしさを読者に伝える。

Jenny Uglow はリビーとフランクの描写について、

Even in this early story realistic detail acquires the force of metaphor as Libbie sits on her ‘Noah’s ark’ of a chest, gazing at the stars, like a fugitive seeking solid ground amid the restless flow; across the court she sees the shadow of Franky Hall’s hand waving against a drawn blind in ‘constant, weary motion’. Like her, the crippled boy finds solace in nature, gazing at a bunch of Michaelmas daisies from the market, untill ‘by and by one or two of the constellation of lilac stars faded. (Uglow 174-5)

と述べ、路地をはさんで向かい合った部屋で生活しているリビーとフランクがお互いに共鳴しあえる境遇にあることを印象づける描写に読者の注目を促している。

リビーがはじめてフランクと微笑を交わし、二人の間に無言の交流がはじまるくだりは、*“I think she would have been encouraged by this smile to have pro-*

ceeded to a speaking acquaintance. . .” (LMTE 171) と語られる。ここは物語の展開の節目だ。リビーがフランクに贈るために選ぶ小鳥は、見栄えのしない、くすんだ色をした小鳥である。彼女は姿かたちや色の良さではなく、良い声で鳴くことを条件として小鳥を選ぶ。作者はこの小鳥に、リビーの容貌上の欠点やフランクの身体の障害を共有させているのだと考えられる。この小鳥は、小鳥の販売をしている理髪店の主人に可愛がられていなかった。ベッドから立ちあがることさえできないフランクは、鳥籠に入れられている小鳥と似た境遇だ。この小鳥にフランクは共感を覚え、小鳥の言葉が理解できるようにささなると。このあたりに、物語の構図のうえでの作者の工夫が窺える。フランクが花を愛し、枯れはじめた花を聖書に挿んで押し花にしたり、鳥籠に入った小鳥をダナム・パークへの遠足に連れていくという挿話などは、孤独な少年のこのころの美しさを印象的に示すものである。作者は虚勢を張っている母親と孤独な境遇を受容している息子とを対比させている。読者はこの段階で、息子はリビーと共感できる心境にあるが、母親はそんな状況ではないことを察知できる。短い作品では作者が倫理観などをそのまま書き込むことになりがちで、「手と心」(“Hand and Heart”) などにはその傾向が強く感じられるが、「リビー・マーシュの三時代」はいわば楽章のようにトーンを変える三部構成の中にテーマを手際よく溶け込ませて創作されている。

(3)

ギヤスケルは、この作品を三部構成にし、「第一の時代——ヴァレンタインの日」(“ERA I VALENTINE’S DAY”), 「第二の時代——精霊降臨祭」(“ERA II WHITSUNTIDE”), 「第三の時代——聖ミカエル祭」(“ERA III MICHAELMAS”) という具合に、リビーのある一年の三つの祝祭日に段階的に転機が起こるといって工夫をしている。

「第一の時代」では、語り手はリビーの孤独な境遇を読者に印象づける。リビーは家族をすべて失った境遇にあるが、亡くなった弟に関して *“... her little brother long since dead – he would have been more than nineteen had he been alive, but she only thought of him as the darling baby.”* (LMTE 168) という哀惜の念を抱きつづけている。そんな彼女には、ディクソン家の人たちの家族生活は眩しすぎ、彼らによって孤独を癒されることはなかった。ヴァレンタインの日は彼女の

誕生日で、母の死後は幸福だった誕生日のことが思い出されて悲しかったが、小鳥の鳥籠をフランクに送り届けることを思いついたので、近づいてきたこの日が楽しみになる。彼女は、まだ言葉を交わさない少年に積極的に働きかけ、人生ではじめて攻勢に出る。少年の孤独で単調な生活に、楽しみを提供することを思案するだけで、彼女は単調な生活からなかば脱出しているのである。

I doubt I may not tell you here of the anxieties and the fears, of the hopes and the self-sacrifices – all, perhaps small in the tangible effect as the widow’s mite, yet not less marked by the viewless angels who go about continually among us – which varied Libbie’s life before she accomplished her purpose. (LMTE 172–3)

贈り物をするという大胆な行為への心配や不安、少年が喜んでくれるだろうという望み、無けなしのお金をはたくことや犠牲の大きさなど、こもごもの思いが書かれているが、リビーのこの引用文中の“the widow”は、聖書のマルコによる福音書第十二章で貧しい寡婦が賽銭箱にいちばん少額ながら生活費全部を入れたのをみて、イエスが弟子たちに“... this poor widow hath cast more into the treasury than all the others. They all give out of their wealth, but she, out of her poverty, put in everything – all she had to live on.” (Mark 12: 48) と語る場面の寡婦である。この貧しい寡婦が抱いたと同じようなひたむきさで、リビーはフランクに鳥籠を贈ろうとしたのであり、少年を慰めたいという思いの深さが感じ取れる。けれども彼女には、やさしさを施そうとしているだけではなく、少年と共感的な関係に入ろうとしている気持ちがあることをも読み取らなければ、彼女の深い孤独感を理解したことはない。小鳥屋に小鳥の名前が“Jupiter”だと教えられて、リビーは“I could bring my tongue round to Peter; would he answer to Peter?” (LMTE 174) と尋ねる。リビーは、フランクには“Jupiter”という名が発音しにくいと考えて、“Peter”で小鳥に通じるかどうかを確かめたのだろうか。作者は天の支配者の名前を否定し、イエスの使徒の名をつけるという工夫をしたのかもしれない。

(4)

「第一の時代」はリビーの救いようがないほどの孤立の状況を語るため、冬が近い十一月に始まり、創世記中のノアの方舟の隠喩によってリビーの漂泊の思いが語られる。そしてこの第一章はやがて春が訪れる二月で終わり、楽しい「第二の時代」が始まる。Jupiter という名の小鳥がリビーとフランクとマーガレットの三人に幸福をもたらしたことについて作者は、“Jupiter might have been a dove, and his ivy leaves an olive branch, for the peace he had brought, the happiness he had caused, to three individuals at least. (LMTE 176–7) と書いている。方舟に乗っているノアが放った鳩がオリーブの葉をくわえて帰ってきた挿話に重ねて三人の平和を語っているのである。

「第二の時代」では、六月の精霊降臨祭に近隣の人たちがダナムへ日帰りの旅をするのに参加しようというリビーの提案に、マーガレットとフランクが同意し、隣人たちと揃って遠出をする。フランクは小鳥のことをリビーに、“... he’s just a Christian, so fond of flowers and green leaves, and them sort of things. ... I’ll carry him in my own arms.” (LMTE 177–8) と訴え、旅に連れていく。世間から軽視されてきた少年が、理髪店の奥の部屋で同じように不遇であった小鳥を連れて遠足に出、少年と小鳥と一緒に自然の中での喜びを知る。フランクはこれまで母親に保護され、受ける愛しか知らなかったが、この小鳥によって、他者を保護し愛を与えるという喜びを知ったわけだ。リビーからフランクへ、今度はフランクから小鳥へと、愛が広がっていくのが感じ取れる。

遠くから子どもたちの賛美歌の合唱が聞こえてくる。見知らぬ人々もフランクにやさしい。けれども、この幸せな「第二の時代」にも、リアリスティックな厳しい場面が一か所だけある。それは、ダナムへ向かう馬車の車中の場面で、リビーとマーガレットとの性格を対照させる次のような描写ではじまっている。

Libbie fell very shy, and very much afraid of being seen by her employers, ‘set up in a coach!’ and so she hid herself in a corner, and made herself as small as possible; while Mrs Hall had exactly the opposite feeling, and was delighted to stand up, stretching out of the window, and nodding pretty nearly everyone they met or passed on the foot-

paths. (LMTE 178)

二人の性格のちがいをこのように対照的に述べた後で、語り手は周囲の人たちに対するリビーの鋭い観察を語る。

One after another drew near to Franky, and looked on with interest as he lay sorting the flowers given to him. Happy parents stood by, with their household bands around them, in health and comeliness, and felt the sad prophecy of those shrivelled limbs, those wasted fingers, those lamp-like eyes, with their bright, dark lustre. His mother was too eagerly watching his happiness to read the meaning of those grave looks, but Libbie saw them and understood them; and a chill shudder went through her, even on that day, as she thought on the future. (LMTE 182)

マーガレットはわが子がみんなに思いがけなくやさしくされているのを見て単純に喜んでいるが、リビーはフランクの辛い将来を予想して暗い気分になっている。やさしい人たちがばかりが登場するこの作品中で、この段落の描写だけはいささか厳しい。作者は幸福な人たちの眼差しをリアルに描写することによって、フランクに対するリビーと他の人たちの受けとめ方の違いを印象づけようとしているのである。苦難を経験していない単純な善人には、一時的な優しさは発揮できるが、結末でのリビーのように、相手の苦勞をともに背負うほどの愛情をもてるかどうかは疑問である。

しかしこの章で、フランクは生まれてはじめて自然に親しみ幸福を実感する。彼はリビーに、ダナムは天国なのかと尋ねる。この問いかけによって、彼女は彼が天国の存在を信じていることを知る。また、作者は“... the world was so beautiful, and men, women, and children all so tender and kind; so softened, in fact, by the beauty of this earth, so unconsciously touched by the spirit of love, which was the Creator of this lovely earth.” (LMTE 184) と書いて、神の創造による美しい自然の中では人がやさしくなることを読者に確認させようとしている。

リビーはその夜、向かいの窓からフランクが遠足で覚えた賛美歌を口ずさんでいるのを聞く。歌詞は、この世では哀しみや苦しみがあがり、人は出会っても別れるが、天国では別れることはないという内容である。

そして作者はこの幸福な章を、この歌の “In Heaven we part no more.” (LMTE 185) という一行で結んでいる。これは、やがて少年が天国に去り、リビーがいつか天国に来るのを待つことになるという次の章への予告となっている。

フランクは死ぬことによりマーガレットとリビーに別離の哀しみを与えるが、彼自身は永遠の安らぎに入る。キリスト教を信仰したギヤスケルは、死は天国において新しい存在になることだと信じていた¹⁾。

(5)

「第三の時代」では、人々はマンチェスターの日常生活に帰る。

フランクの葬儀が終わった夜、翌日ボブ (Bob) と結婚式を挙げることになっているアンヌから、新婦付添い役を頼まれる。酒飲みの父と結婚した母の苦勞や若死にをみてきたため “the odd jobs God leaves in the world for such as old maids to do” (LMTE 189) によって独身を通す覚悟をしているリビーにとって、亡父と同じように酒飲みであるボブとアンヌの付添い役は、“a moral impossibility” (LMTE 190) である。けれども、リビーはアンヌにこの結婚をあきらめさせることはできない。アンヌのように安易に幸福を求めようとする者は、瞬時の快樂のあとで苦難に見舞われるか、そうではなくても、神に祝福される真実の幸福に至ることはできそうにない。このくだりは読者に、アンヌの結婚生活が苦難に満ちたものになることを予想させる。

リビーはこれまで、フランクが死ぬまで愛情を注いでいこうと思いつめてきたが、これからは独りきりになったマーガレットと暮らそうと決心する。マーガレットがリビーの申し出に感謝できるのは、虚勢から解放され、自分に素直になっている証拠である。それに対してリビーは、私たちはどちらもフランクというただ一人の愛する者を失って孤独になったのだから、もし一緒に暮らしてもらえらば、怒りの発作が起こりやすいあなたの病気を治すように努力すると誓う。

アンヌはリビーに、デイクソン家に下宿をつづけていたら平穏な生活ができるのに、発作を起こすマーガレットと同居するのは愚かな選択だと言って反対する。けれども、愚かな行為だと判断するのは、人の善性を信じていないからである。アンヌは孤独に陥った経験も信仰心もないから、リビーの “brave and strong” (LMTE 192) な行為が理解できない。叡知に

よる勇敢な行動によってはじめて幸福がつかめることがわからない。

リビーは、親切だったディクソン家の人たちに感謝しつつ、マーガレットと同居するためディクソン家を出ていく。リビーにとってフランクは心情的には亡くなった弟であり、マーガレットは母である。「第一の時代」で “. . . the bright visions of a home of her own at some future day, where, loving and beloved, she might fulfil a woman's dearest duties.” (LMTE 168) を密かに望んでいたリビーは、孤独から解放される。いっぽうのマーガレットはフランクとの死別によって哀しみを経験し、孤独を深く実感することにより他人と共感できるようになっていた。孤独の体験が共生の資格なのである。

短編小説としてもそう長くないこの作品で、ギヤスケルはリビーの成長をまことに要領よく描いている。「第一の時代」では孤児である自分を哀れみ、縫い物を申し出る時のほかは人々が自分を省みてくれないことを嘆き、愛されないことに絶望していたリビーが、結末では積極的に他人を愛するようになっていく。

リビーが路地の向かいの窓にフランクをはじめて見た時に、彼女の家族づくりはすでに始まっていたと考えることができる。父が酒に溺れ通したために家族が破滅した経験から彼女は、家族とは必ずしも血縁関係ではなく、愛情にもとづく親密な共同生活であるという信念に到達している。ギヤスケルは、女性は結婚によってというよりも、家族をもつことによって幸福になれるのだということをこの短編小説で示している。この家族観を、ギヤスケルはこれから後の作品で繰り返して描くことになる。ユーグロウは、“Love is a social virtue, not a biological instinct.” (Ugnow 177) と述べ、この作品の結末について “Margaret and Libbie cannot change their external conditions, but by acting as mother and daughter they alter the quality of their inner lives. Neither is ‘only a single person any longer.’” (Ugnow 177) と批評している。二人の女性は、social virtue としての愛によって結ばれ、母と娘になったのである。

語り手は結末の〈後記〉で、“the moral” (LMTE 193) を読んだかどうかと読者に問いかけ、リビーが常に平和なところを保つことができた秘訣を読者に伝える次のような一文で作品を結んでいる。“She has a purpose in life; and that purpose is a holy one.” (LMTE 193)。人生の聖なる目的とは、積極的に人を愛し、苦難に陥っている人を救うために献身することである。

これは人が真の幸福に到達する唯一の道である。

処女作である「リビー・マーシュの三時代」は、その後のギヤスケルの中・短編小説の傾向を予測させる特色をもっている。牧歌調の雰囲気や障害のある子どもの死を扱っていること、一時的な情熱による無思慮な結婚への批判、主人公が孤独な女性であること、未婚女性の母性的な愛情や結婚をしないで血縁のない家族をもつことなどは繰り返し取りあげられて、この作家の作風の一つになっている。

〈後記〉はいささか説教臭い。Annette B. Hopkins は、“She too obviously takes the pulpit.” (Hopkins 89) と批判している。けれどもギヤスケルにとっては、信仰を語ることが創作の目的の一つであったことを理解すべきである。

(6)

血縁のない家族を扱っている系列の短編小説のうちで、「半生を顧みて」は、主人公スーザン (Susan) が他の女と結婚した恋人の遺族と「血縁のない家族」をつくるという点で注目すべき作品である。

スーザンは母の死につづいて父を発疹チフスで失い、父の看病で彼女自身が感染して意識不明の状態になり、意識を回復した時には父は死亡していて、弟ウィル (Will) の精神障害が重くなり、婚約者は去って行く。スーザンは母の遺言によって、弟の介護者になる。ダシーはこの作品について “the story develops naturally through the hopes and illusions of youth and the conflicts of adult life to the final acceptance which characterises maturity.” (Duthie 194) と述べ、“the quiet heroism of a Cumbrian ‘Stateswoman’” を語った作品の中でいちばん優れていると批評しているが、意識が戻るやスーザンは厳しい現実と直面し、苦難を経て人生半ばでようやく諦観に達する。

この作品には、注目すべき点が二つある。一つは弟に対するスーザンの母性的愛情の強靱さの描写、もう一つは情熱的な恋愛による結婚への警告である。母性は、意志ではコントロールできないから行為に直結する。だから母性を描写するためには、主人公を行為に走らせる境遇に置かなければならない。また、ギヤスケルの信仰は神秘的な瞑想ではなく行動に直結している。スーザンの行動の根底には、作者の信仰が底流している。だから、弟を介護するスーザンの苦勞に母性愛が具体化されている。情熱的な恋愛結婚の戒めについては、ギヤスケルはたとえば「マンチェスターの結

婚] (“The Manchester Marriage”) では船員のフランク (Frank) の情熱による衝動的な結婚を戒めて, “The seed of future unhappiness lay rather in Frank’s vehement, passionate disposition.” (MM 229) と書いているが, 「半世紀を顧みて」のスーザンはマイケル (Michael) との結婚を諦めながらも恋心を整理できなかつたために, 彼が死ぬまで諦観に達することができない。

婚約時代に, スーザンは弟に対して乱暴な態度をマイケルに取らせないために威厳を保とうと考え, 自分がマイケルを深く愛していることは示さないでおこうとする。このように彼女が弟と恋人との間の調整に苦慮する様子は, 読者によく納得できる。けれども彼女は, マイケルが見かけがよだけの世間並みの青年で, 彼女を深くは愛していないことに気づきえなかつた。だから, 仮に彼と結婚していても, 彼女は幸福な家族生活をつづけることはできなかつた筈である。このことは, 彼とエレナ (Eleanor=Nelly) との生活が証明している。だから, 彼との結婚を回避したことで, スーザンは不幸を避けたことになる。いっぽう弟を精神病院へ入れないで養護することは彼女が自分で選んだのだから, 苦労はあっても生き甲斐になっていた。結局のところスーザンの不幸の原因は, 彼女がマイケルへの思いを断ち切れなかつたことと, ウイルの病状が極端に悪化したことである。

マイケルには, スーザンへの恋愛感情もあつただろうが, 彼女と結婚することによって農場の経営権を得たいという不純な計算があつた。男がこうした打算をするのは, 少なくとも当時のような家父長制の社会では当然のことなので, ギヤスケルは「ペン・モーファの泉」ではこれを認める立場で物語を進行させている。いっぽうスーザンが結婚の条件としているウイルとの同居は, 客観的に判断してマイケルにとっては厳しすぎるものであつた。弟への深い愛を, 家族ではない恋人に了解させるのは不可能なことであろう。スーザンは, この点において自分本位である。けれどもそれは, 恋人に内在する善性に対する彼女の信頼にもとづくものであることを見落としてはならない。彼女は亡くなった母から弟の後見を託されているにもかかわらず, 弟を冷酷に扱われてもマイケルとの結婚を断念しない。情熱のせいでもあるが, やはり愛する人を信じきっているからでもある。ギヤスケルにとって, 人の善性への信頼は信仰にもとづく信念だつた。仮にスーザンがマイケルの打算に気づいていたとしても, それは善人である彼の中に闖入している邪念だと彼女は考えるだろう。このようなわけだから, スーザンはマ

イケルを憎まないし, エレナに対して嫉妬さえ感じていない。結末におけるスーザンの行為には, 作者の宗教観が投影されているのである。

スーザンは “a strong, independent, healthy girl; a clever help to her mother, and a spirited companion to her father; more of a man in her (as he often said) than her delicate little brother ever would have” (HALTA 101) という申し分のない娘ではあるが, マイケルへの思いを彼の死に遭遇するまで断ち切れなかつたために, 孤独感に苦しみつづける。このように考えると, 「マンチェスターの結婚」で青年の恋愛結婚を戒めた作者が, ここでは勝気な娘の情熱的な恋愛を戒めていることがわかる。

弟の介護から解放されてから, スーザンはマイケルのことを思い, “Who could have thought he loved me so little?” (HALTA 89) と哀しみながら, 次のような感慨に耽る。

... she wished she had not instinctively chosen the right. How luxurious a life haunted by no stern sense of duty must be! And many led this kind of life. ... If he came now, she would agree to whatever he proposed. It was a fever of the mind. She passed through it, and came out healthy, if weak. She was capable once more of taking pleasure in following an unseen guide through briar and brake. (HALTA 89)

作者はスーザンの感慨としてこのように書いているが, 彼女は所詮, 結婚による幸福には縁のない女性だったのだから, “stern sense of duty” (HALTA 89) を守るよりほかはなかつた。もちろん, 義務か愛かのいずれを選んでいても苛酷な生活を余儀なくされる運命であつたが, “duty” には苦難の彼方にく血縁のない家族による平安が準備されている。ギヤスケルはいわば自分の信仰心に基づいてスーザンに義務を選ばせ, 彼女に後半生の幸福を与えた。ギヤスケルは愛によって幸福を得るといふ安易な判断を退けているのである。

スーザンが語る “My life has been so very sad! No one would have cared if I had died.” (HALTA 101) という言葉に, エレナは深く共鳴する。スーザンが弟のために節約して築いた財産を, かつての恋人の未亡人と子どもたちに役立てることになる点は皮肉な結果ではあるが, マイケルは天国で喜んでいと想像でき

る。

ユークロウはこの作品を “one of her most powerful short stories” (Uglow 232) と評価し、Terence Wright は “one of the most profoundly realistic of all Mrs. Gaskell’s fictions.” (Wright 193) と評価している。

(7)

ギヤスケルがしばしば心身いずれかの障害者を、しかも未成人として登場させることについて、相川暁子氏は卓見を述べている。「マンチェスターの結婚」のエイルシー (Ailsie) がオープンショウ (Openshaw) のところを和ませ、やさしい気持ちにさせたのは、ギヤスケルの作品では障害者の役割が神の恵みであり賜物だからだという見解である。これは、「リビー・マーシュの三時代」で聖霊降臨祭の日に人々がフランクを抱いて運び、やさしい気持ちになって休日を楽しむ場面にも当てはまる。相川氏は、「Mrs. Gaskell は幸せな子供時代を過ごすきっかけを作ってくれた、障害者のいとこ Mary Anne に因んで、長女を Marianne と名付けている」(相川 53) ことに注目を促している。

新約聖書に、パウロがコリント人たちへ書き送っている手紙に次のような部分がある。

... there was given me a thorn in my flesh, a messenger of Satan, to torment me. Three times I pleaded with the Lord to take it away from me. But he said to me, ‘My grace is sufficient for you, for my power is made perfect in weakness. Therefore, I will boast all the more gladly about my weakness, so that Christ’s power may rest on me. (2 Corinthians 12: 7-9)

これを読むと、ギヤスケルが苦痛をともなう病気に悩んでいる純真な子どもを登場させ、主要人物を迫害や行き詰まりの状況に置く理由が理解できる。フランクがリビーに安らぎを与え、エイルシーが実利主義のオープンショウのところにやさしさを芽生えさせるのは、障害者がイエスとひとしい十字架を背負っているからだ。「わたしの力は弱いところに完全にあらわれる」ことを、ギヤスケルはフランクやエイルシーによって語っているのである。

スーザンは従順で手間のかからない時の弟と暴れまわる時の弟とを別人と考え、前者が弟であり、後者は

弟に憑いている悪魔だと考え、私が闘っているのは “the third person, the fiendish enemy” (HALTA 92) であると自分に言い聞かせる。ここで私は、うえに引用したパウロの文中のサタンの使者が打った刺を連想することができる。

ウィルは、悪魔に憑かれた時の肉体の疲労で死亡する。姉と弟との間には愛情の絆があり、姉は弟に母性的な愛を注いできた。弟の臨終の様子は次のように書かれている。

But he was so gentle and tender as he lay on his dying bed; such strange, child-like gleams of returning intelligence came over his face, long after the power to make his dull, inarticulate sounds had departed, that Susan was attracted to him by a stronger tie than she had ever felt before. (HALTA 93)

心を病む弟にとって死は敵ではなかったかもしれないが、愛する者を奪い去る死は姉にとって敵であった。スーザンのこの喪失感が、〈血縁のない家族〉を求める気持ちに発展する。ここでも、リビーの場合と同じように孤独感が平安な生活への前提になっている。

スーザンは絶壁のふもとから運び込んできて台所の床に横たえたマイケルの亡骸をみながら、自分の生活から幸福を取り去ることになった様々なことを思い起こす。

If her mother’s cold had been early tended, so that the responsibility as to her brother’s weal or woe had not fallen upon her; if the fever had not taken such rough, cruel hold on Will; nay, if Mrs Gale, that hard, worldly sister, had not accompanied him on his last visit to Yew Nook—his very last before this fatal, stormy night; if she had heard his cry, —cry uttered by those pale, dead lips with such wild, despairing agony, not yet three hours ago! —O! if she had but heard it sooner, he might have been saved before that blind, false step had precipitated him down the rock! In going over this weary chain of unrealized possibilities, Susan learnt the force of Peggy’s words. Life was short, looking back upon it.” (HALTA 98)

スーザンはこのように実感し、召使のペギー

(Peggy) が人生は長くはないと言ったのはやはり真実であったと考える。けれども、スーザンがここで耽っているように過去の苦難を仮定によって一つ一つ打ち消していくことによって、人生が長かったという実感を払拭して、諦観に到達することができるものだろうか。

Guravich は、「半生を顧みて」における代理母 (surrogate mother) について次のような興味深い指摘をしている。

One notable symmetry in “Half a Life-Time ago”, for example, has Susan repaying the comfort and symmetry Peggy offers her through the service she renders Michael’s impoverished widow, Eleanor, and her children at the end of the story. Peggy’s mentoring, as well as Susan’s own struggles, have transformed the ‘stateswoman’ of Yew Nook. Where Peggy has functioned as a surrogate mother to Susan, Susan functioned in the same capacity to Eleanor and her children. (Guravich 124)

私はこれを読んでいて、献身的な代理母を登場させることへの作者の執着のようなものを感じる。おそらくは、作者自身の従姉の Mary Anne や Aunt Lumb への深い思いによるものだろう。

スーザンはエレナと子どもたちを引き取ることによって家族に相当する同居者を得るし、エレナは、夫との暮らしよりも安心な生活を確保する。死亡したマイケルが、一度は念願としていたユー・ヌックの農場の所有を将来彼の子どもたちが果たすことになるだろう。ギヤスケルはスーザンが恋を捨てて母との約束を守ったことを正しい選択だという立場で小説を書き進め、幸福な結末にすることで彼女の選択を読者に納得させている。

(8)

「ベン・モーファの泉」には、三人の母が描かれている。一人は、作品のはじめのほうで語り手が目にとめる女である。若いころロンドンに奉公に出たが身ごもって、ベン・モルフアに帰郷し、障害のある子を産んで育てている。この孤独な女のその無言の忍耐と深い母性愛に隣人たちは感心していた。もう一人は、エレナ・グウィン (Eleanor Gwynn) で、彼女は娘のネスト (Nest) が婚約直後に半身不随になって婚約を破棄

されたあと、娘と悲しみを分かちあいながら死ぬ。三人目のネストは、母が死亡し婚約者が他の女と結婚したあと、精神障害者のメアリ・ウィリアムズ (Mary Williams) を引き取って介護しながら一緒に暮らし、生涯を終える。この代理母の苦労は、弟を介護するスーザンと同じ状況であるが、「ベン・モーファの泉」では、村いちばんの美少女であった青春時代からメアリを残して生を終えるまでの、絶望から苦悩を経て宗教的な信念に到達するまでの心理の経過が、スーザンの場合よりもむしろ綿密に描かれている。障害者を妻に迎えて農業を営むことは不可能だというエドワード (Edward) の事情も読者に納得できる。

悲嘆に明け暮れた母エレナは、説教師デイヴィッド・ヒューズ (David Huse) によって臨終の床で魂の安らぎを与えられる。八十歳のデイヴィッドはエレナの苦悩をイエスが自分の運命を予測した時の苦悩と比較させ、イエスの祈りに対する神からの答えは届かなかったけれども、神がイエスの祈りを聞き届けられたことを私たちは知っているのだと語り、“I have lived eighty and one years, and never yet have I known an earnest prayer fall to the ground unheeded.” (WOPM 137) と説いて聴かせる。これによってエレナは苦難を超越し世を去る。

つづいてデイヴィッドは、孤児になって悲しんでいるネストに神の無限の愛について理解させるのは無理だと判断し、人間同士の愛について語り、もし誰も愛してくれる者がいないのであれば、お前が自分から人を愛しはじめるべきだと説く。これに促されてネストは、自分が恋人のエドワード (Edward) に愛を集中し、他の人たちには思いやりに欠けた無情な態度をとるようになったこと、障害者になってからは心を閉ざして母の愛を感じていながら無視する態度を取りつづけていたことを悔悟する。デイヴィッドはこの告白を聴いたあと、彼女を次のように諭す。

‘Nest,’ said he, ‘your love has been the love of youth—passionate, wild, natural to youth. Henceforward, you must love like Christ, without thought of self, or wish for return. You must take the sick and the weary to your heart, and love them. That love will lift you up above the storms of the world into God’s own peace. The very vehemence of your nature proves that you are capable of this. I do not pity you. You do not require pity. You are powerful enough to trample down your own sorrow into a

blessing for others; and to others you will be a blessing. I see it before you, I see in it the answer to your mother's prayer.' (WOPM 138)

デイヴィッドは、自分の悲しみを他の人への天の恵みに変えることによって救い主の位置に近づくことができる」と説いている。これが、ネストに決意を促すのである。

デイヴィッドは、ネストがメアリを引き取ったのは、亡くなった母親の愛を感じていながら、それを隠し通してきたことに対する良心の呵責があり、厭わしい仕事に打ち込むことでその後悔の念から遠ざかろうとする気持ちによることを察している。けれども、やがて彼女は次のようにメアリと愛情を交わすようになる。

The doors of Nest's heart were opened—opened wide by the love she grew to feel for crazy Mary, so helpless, so friendless, so dependent upon her. Mary loved her back again, as a dumb animal loves its blind master. It was happiness enough to be near her. (WOPM 141)

五十歳になったネストは、老けきって八十歳のように見える。そして、ネストは昨日のことは忘れてしまうのに、昔のこと、母に愛されている美少女であったころのことを鮮明に思い出すようになる。脳の老化現象によって、遠い過去が現在に接近してきているのである。彼女はメアリに助けってもらって、人生を暗転させる負傷をした泉へ足を運び、そこで死ぬ。死によって彼女は青春に還り、救貧院に引き取られたメアリの記憶の中に生きつづける。メアリが精神錯乱に陥った時に、彼女にネストの名前を聞かせると発作がすぐにおさまる。作者はこの作品で、代理母の理想像を描きあげていると言えよう。

ネストとスーザンは二人とも、放縦な恋愛感情を諦めて、イエスのような無償の愛によって後半生を生きる。スーザンがエレナと子どもたちを引き取ろうとする態度には、天涯孤独の境遇から脱出するためには昔の恋人の未亡人と暮らすことを意に介さない、激しく人を恋うる心情が表れている。

(9)

最後に考察する「ヘッペンハイムの六週間」は、女

主人公テクラ (Thekla) が結末で結婚する点がこれまでみてきた作品とは異なるが、血縁のない親子関係を得るという点では一致している。テクラは内在する母性を献身的な行動で実証していき、最後には献身的な代理母として幼な子を急病から救い、その子の父フリッツ (Fritz) と結婚する。語り手の「私」はオックスフォードを卒業して弁護士になろうとする都会的な青年で、テクラが結婚相手を選ぶ際の協力者になる資格がそなわっている。「私」は父から遺産を受け継いでいるからいつでも結婚できるが、理性的であって、テクラに恋愛感情を抱くことはない。この点は、*Cousin Phillis* のポール (Paul) と同じである。重病の介護を受けたことで彼女の母性愛を深く感じたために恋愛に至らず、フリッツの恋敵にならなくてすんだとも言える。

フリッツは子どもが三人いるやもめであるから、男女関係については語り手よりも事情通である。彼は語り手に、テクラについての自分の思いを次のように告白する。

"I have found out this morning that I love her myself, and so the end of it is, that if you, sir, who are so kind as to interest yourself in the matter, and if you think it is really her heart's desire to marry this man [Franz]—which ought to be his salvation both for earth and heaven—I shall be very glad to go halves with you in any place for setting them up in the inn at Altenahr; only allow me to see that whatever money we advance is well and legally tied up, so that it is secured to her." (SWAH 216) (括弧内は著者による)

フリッツのこの告白は謙虚であり、理性的である。冷静さという点ではテクラも同じだが、彼女は不実な恋人であるフランツ (Franz) への "duty" のゆえに、愛情は失っていても結婚をすべきではないかと迷っている。けれども「私」は、彼女のその義務感を捨てるように忠告する。彼は、常識的な判断でも彼女のフランツとの結婚には反対だが、もし彼女が彼をもはや愛していないのであれば結婚は罪を犯すことであると言う。彼は "... she would be sinning in marrying him; doing evil that possible good might come." (SWAH 217) と考える。自分を律する能力のない若者を生涯にわたって支えるために結婚するのは善行のようにみえるが、愛を偽っている点で罪を犯すことで

あるということだ。けれどもテクラは、子ども時代から自分の個人的な影響力があったからフランツはどうか善人でおれたが、自分を失うと彼は人生を誤るだろうと案じ、結婚しなければ良心が満たされないと言う。これについて「私」は、“... the duty of self-sacrifice had taken strong possession of her fancy.” (SWAH 217) と語る。ここで作者は、母性愛が強い場合、それが義務感を昂らせて良心の判断を偏らせてしまうという見解を読者に示していると言える。彼女がフリッツの旅館を辞めてフランクフルトへ家政婦の職を見つけて立ち去ろうとするのは、旅館の女主人 (the Fraulein) からの告げ口によってフリッツが自分への評価を下げてしまったという推測のほかに、帰郷してフランツと結婚し彼を更生させてやろうという気持ちも潜んでいた。これは恋愛感情ではなく、母性愛である。

(10)

作者がテクラをフランツよりも一歳年上にしてるのは、彼女を少女時代から母性愛が発揮できる条件のもとにおこうとする意図によるものだと考えられる。テクラの母が死亡して父が再婚し子どもがいるという設定にも、彼女を義理のきょうだいに対して代理母に近い位置におこうとする作者の意図が感じ取れる。

この作品には、登場人物の中に母という身分の人は一人もいないのに、“mother” という語が何度も使用されている。たとえば、「私」がフランツから届いた手紙で悩んでいるテクラに力を貸そうとする時には、“Thekla, tell me all about it, as you would to your mother, if she were alive.” (SWAH 206) と話しかけている。彼女は子どものころ、“a delicate child” であったフランツを学校へ連れて行き、面倒をみた。フリッツの旅館で重病を患った語り手が召使であるテクラの介護を受けるくだりでは、“Her sweet, grave face had something approaching to a mother’s look of tenderness upon it, as she gave me spoonful after spoonful with gentle patience and dainty care.” (SWAH 199) と書かれている。またテクラはフリッツの幼児を抱いて、“He is my little Max, my heart’s delight.” (SWAH 212) と「私」に話す。ここには“mother” という語は使用されていないが、まるで母親のようなテクラのやさしさが感じられる。

作者はこのようにテクラの母性を叙述した直後に、彼女を宿屋の女主人については “She meant to do everything kindly, I am sure; but a sickroom was not her

place; by a thousand little maladroitness she fidgeted me past bearing.” (SWAH 200) とテクラに言わせている。女主人との対照によってテクラのやさしさを印象づけられているが、その結果、この作者としては珍しく母性が欠落した女を描くという結果になっている。

女主人は、自分がしている親切な行為の不器用さに気づかない。自分の弱さや落ち度が自覚できない女である。だから、他人の不行き届きが気になって苛立ち、その人たちをなじる。自分の弱点が自覚できないために、誤った自信をもって他人を裁いている。そういう意味では強い女である。テクラの解雇願いを聴き入れ転職先を見つけてやるのも、この勤勉な召使がいなくなることによる不便さを予測できない強気のあらわれである。いっぽうのテクラは他人を裁かないで、常に許している。運命が課してくるものをすべて、自分を犠牲にして受容しながら生きていこうとしている。

ギャステルにとっての母性の第一の特色は、人を善とみることである。フランツが放蕩をしていることについて、テクラは “I suppose he fell among bad people.” (SWAH 207) と考える。自己を律することができなかったフランツは明らかに bad people を構成する一人なのだが、彼女の頭の中では、悪人は漠然とした概念としては存在するが、個人としては存在していない。女主人や召使仲間のロットヒェン (Lottchen) などの欠点にも彼女は無感覚なようであり、父の後妻つまり継母についても善意を示そうとしている。こういったことから、母性の第二の特色は自己犠牲ということになる。テクラは婚約者が放蕩をしていても、また他の女と結婚しようとしていても、彼が請求すれば送金しつづける。

テクラが愛していないフランツと結婚するのは罪だと「私」が考えるのは、一般的な通念による判断である。ところが彼女は、苦難を負うことになるのは明らかなのに、フランツの希望に従おうとする。これはフランツの内面に本人も気づいていない善性があるとテクラが信じているからであり、一般的な通念を超えた判断である。彼女はフランツを、個人ではなく普遍的な人間として認識し、望ましくない行為をする彼のころの無明の底に哀しさがあることを洞察している。このような点でテクラは宗教的な存在である。

テクラには、聖母マリアを読者に連想させる場面や描写が多い。たとえば、彼女は重病の幼なじみマックス (Max) を抱いて徹夜で介護し病を癒す。幼なじみを両腕で抱いているため、自分では食事がとれない彼女の

口へ、幼な子の父であるフリッツが食べ物を運んでやる。「私」はこの情景をみて、エリザベス・インチボールド (Elizabeth Inchbald) の散文ロマンスである *A Simple Story* のある場面を思い出す。それは、ミルナー (Milner) という名の美しい浮気女が、保護者であるカトリック司祭を恋して絶望的になり食事ができなくなった時に、彼が食べ物を与える場面である。これは、フリッツのテクラへの愛の自覚を読者に暗示するための作者の巧みな工夫であるが、ここで母性愛の女であるテクラは、幼な子の命を救った喜びのなかで、幼な子の父を愛していることを自覚する。このような場面を読んでからもう一度作品を読みなおしてみると、語り手が最初に彼女をみた時、彼女の顔は“expressive of goodness and sense” (SWAH 197) であったが日焼けして赤みがかっていて、その目は“grave-looking eyes which had shed tears for past sorrow” (SWAH 197) だったという表現が、荒野をさまよってきた聖母の顔を暗示していることがわかる。終始強気な態度をとる女主人とちがって、ほんとうに強いのはテクラのほうである。彼女は、*virgin* のままでやさしく崇高な母になっている。ギヤスケルの読者の中には、作者がよくやるようにここでも幼な子を死へ追いやるのかと危惧するが、ここでは健康を回復する。そうしなければ、聖母子像は完成しないからであろう。

テクラが病床から起きあがれない「私」にスープを飲ませる場面で、彼女は枕の下に腕を入れて彼を起こす。その時語り手は、“... her support was as firm as a man's could have been.” (SWAH 200) と感じる。またフランツは彼女の影響下にあるうちは悪くはなかったが、離れるとよくないことにのめり込んでしまうので、ふたたび保護を求めてくる。さらに、やさしくて頼り甲斐のある男であるフリッツでさえ彼女を愛し、彼女がいなければ子どもたちの親の役割が果たせないと思っている。こんなわけで、テクラのやさしい翼の中で男たちはみんな安らぐ。ギヤスケルの文学の特質の一つは、このように母性の豊かな女が男たちの優位に立っていることである。テクラの苦悩も労苦もすべては彼女に内在する母性によるものであり、また彼女の喜びもその母性を満足させることに他ならない。

フリッツは、思慮深い男性である。作者はこのフリッツとテクラを結婚させることによって、一つの理想的な結婚を語っているのである。女主人公が結婚する前に第三者が産んだ子どもに恵まれるのは、ギヤスケルの作品によく見られる結末である。

遠藤周作は、新約聖書に登場する女たちはイエスの

処刑後まで忠実であったのに、男の弟子たちは自分本位で臆病者だったと繰り返し述べている²⁾。このことは、最後の晩餐によくあらわれている。彼らは鈍感で、逮捕と死の予感による師の苦悩を理解していない。ユダの先導で師を捕らえる男たちが現れると、男たちは逃げ出してしまう。いっぽう女たちは、マグダラのマリアもラザロの妹のマリアも聖母マリアも、一途で、身を捨ててイエスの方へ向かってくる。女たちは、十字架を背負ったイエスを刑場の丘まで見え隠れしながらついていき、彼が息を引きとるまで見守る。聖書の中の女たちのこのようなひたむきさはギヤスケルが描く女性たちに当てはまり、彼女たちの男に対する優位性を理解する助けになる。遠藤は「新約聖書の作家たちはフェミニストだったらいい」(遠藤 39) と書いているが、この解釈も、献身的な女たちを創造したギヤスケルに当てはまりそうである。

「ヘッペンハイムの六週間」では、代理母であるテクラがその姿まで聖母マリアと重なっている。これによっても、結婚していない女性が母性愛によってつくる〈血縁のない家族〉が聖書を根底において創作されていることがわかる。

「リビー・マーシュの三時代」, 「半生を顧みて」, 「ペン・モーファの泉」の主人公たちはいずれも結婚によらない点では疑似的な、けれどもこころの固い絆によって結ばれた家族をつくる。また、「ヘッペンハイムの六週間」のテクラは結婚前に、血縁によらない幼い子を得る。四人に共通しているのは、代理母であるということである。これらの短編小説から、ギヤスケルが情熱的な恋愛ではなく分別による家族愛、血縁にこだわらない家族関係に肯定的であったことがわかる。

注

- 1) ギヤスケルが天国の存在を固く信じていたことは、*Cramford* において合理主義者である Mary Smith にさえ “I thought of Miss Jenkyns, grey, withered and wrinkled, and I wondered if her mother had known her in the court of heaven: and then I knew that she had, and that they stood there in angelic guise.” と述懐させていることなどからも窺える。
- 2) 遠藤周作は、著書『聖書のなかの女性たち』(講談社, 1972年), 『イエスに選んだ女たち』(講談社, 1990年)で、マグダラのマリアを初めとする女の弟子たちのほうが、男の弟子たちよりもイエスに対し忠実であったと述べている。

引証資料

- Duthie, Enid Lowry. *The Themes of Elizabeth Gaskell*. London: The Macmillan Press LTD, 1980.
- Guravich, Peter Barry. *Class Consciousness and Domestic Service in Elizabeth Gaskell's Shorter Fiction*. USA: UMI Dissertation Services, A Bell and Howell Information Company, 1997.
- Hopkins, Annette B. *Elizabeth Gaskell: Her Life and Work*. New York: Octagon Books, 1971.
- Gaskell, Elizabeth. *A Dark Night's Work and Other Stories*. World Classics, New York: Oxford University Press, 1992. “Libbie Marsh's Three Eras”と“Six Weeks at Hепенheim”のテキストからの引用はこの版を用い、それぞれ“LMTE”, “SWAH”の略語とともに頁数を括弧内に記す。
- ... *Cousin Phillis and Other Tales*. World Classics, New York: Oxford University Press, 1981. *Cousin Phillis*と
- “Half a Life-Time Ago”のテキストからの引用はこの版を用い、それぞれ“CP”, “HALTA”の略語とともに頁数を括弧内に記す。
- ... *The Moorland Cottage and Other Stories*. New York: Oxford University Press, 1995. “The Manchester Marriage”と“*The Well of Pen-Morfa*”のテキストからの引用はこの版を用い、それぞれ“MM”, “WOPM”の略語とともに頁数を括弧内に記す。
- Ugnow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. London: Faber and Faber, 1993.
- Wright, Terence. *Elizabeth Gaskell 'We Are Not Angels' Realism, Gender, Values*. London: Macmillan Press LTD, 1995.
- 相川暁子「*The Manchester Marriage* について」『実践英文学』第45号, 1995年。
- 遠藤周作『イエスに選った女たち』講談社, 1972。
- 比較家族史学会編『事典家族』弘文堂, 1996。